

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 20 日現在

機関番号：34513

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25284082

研究課題名(和文) 変異理論の新展開と日本語変異データの多角的分析

研究課題名(英文) New developments in Variation Theory and Multifaceted Analysis of the Japanese Language

研究代表者

松田 謙次郎 (Matsuda, Kenjiro)

神戸松蔭女子学院大学・文学部・教授

研究者番号：40263636

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 8,700,000円

研究成果の概要(和文)：実時間調査班は、岡崎敬語調査関連で品詞比率分析を論文化し、実時間調査の諸問題点について口頭発表を行った。札幌山鼻地区における共通語化調査では、生涯変化は観察し難いこと、言語イデオロギーが影響力を持つことなどが判明した。混合モデル分析班は、日本在住英語母語話者同士の自然談話から、標準アクセントの使用は話者の日本語能力の自己評価と英語母語英語教師とのネットワークと相関があることを示した。言語理論班は、連濁の数量的条件を明らかにした。社会音声学班は、鹿児島方言二型アクセントの音調交替現象について起伏式音調への対応は脱方言化現象、平板式音調への対応は脱標準語化現象であることを示した。

研究成果の概要(英文)：The real-time study group published an article on the relative frequencies of noun, verb and pronoun, and made a presentation on the methodological problems of real-time studies of language change. The analysis of the standardization process in Yamahana, Sapporo found that no lifespan change is observed, and the language ideology has an effect on the process. The mixed-effect model group looked at the discourse of English-native English teachers in Japan, and found that the use of the standard accent shows a correlation with the self-assessment of the Japanese proficiency and the network with other English teachers. The linguistic theory group showed the phonetic conditioning of the rendaku process in a quantitative manner. The sociophonetic group demonstrated that, in the intonation alternation phenomenon in the Kagoshima Type-II accentuation system, an LHL pattern is best described as a dedialectization process, whereas an LHH pattern should be seen as a destandardization process.

研究分野：社会言語学

キーワード：変異理論 音調の変異 連濁 社会的ネットワーク 国会会議録 漢語の読み 実時間パネル調査 メディアの影響

### 1. 研究開始当初の背景

Labov (1962)によって誕生した変異理論は、ほぼ1970年後半から80年頃にかけて安定したパラダイムが完成した。自然談話を中心としたデータ収集法、言語内的・外的諸変数の定義、多変量統計分析法、代表的な説明理論はここまでに完成し、専門学会であるNWAVも拡大を続け、北米・ヨーロッパを中心として対象言語と研究者も世界的規模に成長した。日本語への応用でも、Hibiya (1988)を始めとして、この成熟期のパラダイムが適用されている。

1990~2000年の間に、このパラダイムに大きな変化が生じた。実践共同体や話者の主体的なスタイルの構築 (Eckert 1990) といった作業概念の導入、社会音声学 (sociophonetics) の確立 (Hay and Drager 2007)、統計ツールとしての混合効果モデル (Mixed-effects Model) の適用 (Johnson 2009)、理論言語学との接近、そして実時間データによる言語変化理論の修正 (Boberg 2004, Sankoff & Blondeau 2007) など、いずれも教科書の書き換えを強いるようなレベルの大きな変革であった。

このパラダイムチェンジは現段階では日本の変異理論界にはまったく影響を与えていない。現段階では日本の研究レベルは欧米のそれに比して20年以上遅れていると言っても過言ではなく、我が国の研究はガラパゴス状態にあると言える。たいていの入門的教科書記述も、せいぜい1980年代の枠組み止まりである。

こうした現状を打開するには2つのことをなす必要がある。一つは新パラダイムによって多角的なデータから日本語諸変異の再分析・新分析を提示することである。二つ目は、そうした作業を通じて新パラダイムの検証を行い、その結果やデータを国際的に発信し、パラダイムの改変・修正に積極的に参画することである。

### 2. 研究の目的

本研究の目的は、以下の4点に要約できる:

- (i) 2000年以降に北米を中心に次々と始まった変異理論のパラダイム革新を批判的に検討し、
- (ii) 実践的共同体 (Community of Practice)、社会音声学 (sociophonetics)、理論言語学やコーパス言語学との融合、混合効果モデル (Mixed-effect Model)、実時間分析といった革新の産物である諸概念や新分析法を用いて日本語諸方言に見られる変異・変化を分析し、
- (iii) そこからの知見を旧パラダイムでの知見と比較、検討を重ねた上で、
- (iv) 日本語変異分析の成果を国内外で発信し、言語変異・変化理論の理論的構築に寄与し、国内外での研究に新展開をもたらす。

### 3. 研究の方法

本研究は、(1) 実時間調査データ分析に基づく言語変化理論の構築、(2) 新たな社会的制約条件を援用した社会音声学的研究、(3) Rbrulを使った混合効果モデルによる変異データ分析、(4) 理論言語学的観点からの変異データ分析の4サブプロジェクトに分け3年計画で行う。連携研究者は年2回の研究発表会に参加し、研究成果を共有し討議すると同時に、全体的な評価を行う。

初年度はおもにデータ収集と文献調査に当たる。次年度以降の準備期間という位置づけである。2年目以降は、データ分析に集中する。3年目は仕上げ段階と位置づけ、データ分析からの理論構築に携わり、同時に学会口頭発表・論文・報告書の執筆など成果発信に力を注ぐ。なお、外部からのフィードバックと発信を目的として、必ず毎年国内外での発表を実施するものとする。

### 4. 研究成果

- 1) 実時間調査データ分析に基づく言語変化

理論の構築班：

札幌市中央区山鼻地区における札幌市方言名詞アクセントの共通語化に関する実時間パネル調査と分析を完了した。約四半世紀前に行われた前回調査の結果と照らし合わせ、各被験者の生涯変化の動態を分析したところ、ほとんどの被験者において生涯変化は観察し難いという結論に達した。その後、言語内的要因だけでなく、社会的要因に焦点を当て、混合効果モデルを含めた Rbrul による当該変異の分析を行った結果、各話者の持つ「言語イデオロギー」が独立変数として影響力を持つことが判明した。この研究の独自な点は、Rbrul を用いた本格的な研究であるにとどまらない。これまでの実時間データ分析では、言語イデオロギーを含めた研究例はなく、実時間調査の分析例としても独自の結果が出せたという点で特筆すべきものと思われる。

また議事録を使った通時的研究から発展し、国会会議録を用いた日本語学、政治学などの学際的研究の可能性について検討した。さらに、大正～昭和戦前期の演説・講演録音における漢語の読みの変異についての分析を行い、「軍人読み」の可能性などを指摘した。後者については、研究例の少ない時期の日本語の動態を探った研究として、資料の面からも、また実質的な知見の面からも価値のあるものと考えられる。

(2) 新たな社会的制約条件を援用した社会音声学的研究班：

鹿児島方言若年層話者のアクセント型の交代現象について、言語的要因、話者要因、メディア要因などを独立変数、革新形の生起を従属変数として統計モデルにより説明を試みた。これらの要因の影響は特に平板式音調において顕著であることが確認された。従来の社会言語学的研究では、テレビのようなメディアからの言語への直接的影響を過小評価する向きがあったと思われるが、この研

究では経験的結果からメディアの英語野影響を実証したところに大きな貢献を見出すことができる。

(3) Rbrul を使った混合効果モデルによる変異データ分析班：

日本在住英語母語話者同士による自然談話の英語コーパスに観察される日本語に焦点を当て、日本語の標準アクセントの使用率を話者の社会的ネットワークと言語生活の側面から考察した。統計分析の結果、標準アクセントの使用は話者の日本語能力の自己評価、英語母語話者英語教師とのネットワークと強い相関関係のあることが判明した。社会的ネットワークという観点を含めた成人の日本語の標準アクセント習得の研究ということで、単に Rbrul を用いた研究であると言うばかりでなく、成人の言語習得におけるネットワークの関わりを明らかにした重要な貢献を果たしているものと評価される。

(4) 理論言語学的観点からの変異データ分析班：

「連濁」と「外来語有声促音の無声化」(例、ドッグ ⇒ ドック)を対象に「日本語話し言葉コーパス」を用いて数量的分析を行い、混合効果モデルによりこれらを促進・抑制する要因、及び相互作用を明らかにした。この研究では、理論言語学的な問題に対して、コーパスデータから得られたデータを統計分析することでアプローチを試み、一定の成果を出したという点で、まさに理論と経験的アプローチの結合の好例であると言える。

各班は研究会で相互の研究を批判し参照しあうことで、当初考えられていたよりもはるかに大きなシナジー効果が得られた。研究開始時点で捉えていた各自の問題は一応の解決を見たものの、その過程で各自がさらに発展的なトピックを発見するに至り、プロジェクトは大きな成功を収めたと言える。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 22 件)

【2015 年度】

- 1 平野圭子 「英語母語話者の言語生活と日本語の発音」 『第 36 回社会言語科学会大会発表論文集』.126-129. [査読無]
  - 2 二階堂整、川瀬卓、高丸圭一、田附敏尚、松田謙次郎. 「地方会議録による方言研究 セミフォーマルと気づかない方言」 『方言の研究』 1 299-324 [査読有]
  - 3 二階堂整、松田謙次郎、高丸圭一、山際彰、佐藤亜美. 「地方議会会議録から見える日本語のバリエーション」 『日本語学会 2015 年秋期大会予稿集』 225-242 [査読有]
  - 4 太田一郎. 「鹿児島方言のアクセント型交替とその要因について」 『九州地区国立大学教育系・文系研究論文集』 3 [査読有].
  - 5 Sano, Shin-ichiro. "Universal markedness reflected in the patterns of voicing process." *Proceedings of the 45th conference of the North East Linguistic Society*. 3 549-58 [査読有].
  - 6 Sano, Shin-ichiro. "Optimization of the verbal inflectional paradigm by the cyclic application of morphophonological processes: Evidence from potential forms in Japanese" *Open Linguistics* 1 580-595 [査読有].
  - 7 佐野真一郎・南部智史. 「コーパスを用いた現代日本語における「が/を交替」の実証的研究」 『日本言語学会第 150 回大会予稿集』 68-73 [査読有]
  - 8 Fukazawa, Haruka, Mafuyu Kitakara, Shigeto Kawahara, and Shin-ichiro Sano. "Two is too much: [p]-driven geminate devoicing in Japanese Phonological Studies" 18 3-10 [査読有]
  - 9 Takano, Shoji & Ota, Ichiro. A Sociophonetic Approach to Variation in Japanese Pitch Realizations: Region, Age, Gender, and Stylistic Parameters *Asia-Pacific Language Variation.2* 印刷中. [査読有]
- 【2014 年度】
- 10 平野圭子 「日本在住英語母語話者のコードスイッチング」 社会言語科学会 『第 33 回大会発表論文集』 Vol. 38 154-157. [査読無]
  - 11 松田謙次郎. 「形態素解析の大規模言語調査データへの応用 岡崎敬語調査パネルデータにおける名詞・代名詞・動詞の相対頻度数に対する話者性別効果の検証」 『国立国語研究所論集』 Vol. 7, 151-165. [査読有]
  - 12 Sano, Shin-ichiro. "Violable and Inviolable OCP Effects on Linguistic Changes: Evidence from Verbal Inflections in Japanese" *MIT Working Papers in*

*Linguistics* 66 145-156. [査読有]

- 13 Sano, Shin-ichiro. "Patterns in Avoidance of Marked Segmental Configurations in Japanese Loanword Phonology" *Proceedings of GLOW in Asia IX: The Main Session* 245-260. [査読有]
  - 14 Kawahara Shigeto and Shin-ichiro Sano. "A Corpus-Based Study of Geminate Devoicing in Japanese: Linguistic Factors" *Language Sciences* 40 300-307. [査読有]
  - 15 Sano, Shin-ichiro and Shigeto Kawahara. "A corpus-based study of geminate devoicing in Japanese: The role of the OCP and external factors" 『言語研究』 Vol. 144 103-118. [査読有]
- 【2013 年度】
- 16 平野圭子. "A new-dialect formation in an L2 setting: A rudimentary levelling among native speakers of English in Japan" Online Publication of the 19th International Congress of Linguists, 2013. University of Geneva, Switzerland. <http://www.cil19.org/abstract/contribution/529/> [査読有]
  - 17 松田謙次郎 「個人の敬意は生涯変動を見せるのか？ 段階付けによる岡崎敬語調査パネルデータの分析」 『日本語学会 2013 年度春季大会予稿集』 43-47. [査読有]
  - 18 Sano, Shin-ichiro. "Examining Lexical and Phonological Factors on Rendaku in Spontaneous Speech." *MIT Working Papers in Linguistics* 73, 179-190. [査読有]
  - 19 Kawahara Shigeto and Shin-ichiro Sano. "Identity Avoidance and Lyman's Law." to appear in *Lingua* 150, 71-77. [査読有]
  - 20 Kawahara Shigeto and Shin-ichiro Sano. "Testing Rosen's Rule and Strong Lyman's Law." *NINJAL Research Papers* 7, 111-120. [査読有]
  - 21 Sano, Shin-ichiro. "The Roles of Internal and External Factors and the Mechanism of Analogical Leveling: Variationist- and Probabilistic OT Approach to Ongoing Language Change in Japanese Voice System." *Phonological Studies* 17, 101-110. [査読有]
  - 22 Kawahara Shigeto and Shin-ichiro Sano. "Identity Avoidance and Rendaku." *Proceedings of the 2013 Meeting on Phonology*. [査読有]

[学会発表](計 26 件)

【2015 年度】

- 1 Hirano, Keiko, and Britain, David. "The influence of social networks on grammatical variation: Verbs of obligation produced by native speakers of English in Japan" Language Variation and Change 2015 Forum 2015 年 5 月 30 日

Fukuoka University, Japan.

2 平野圭子. 「英語母語話者の言語生活と日本語の発音」 第 36 回社会言語科学会大会 2015 年 9 月 6 日 京都教育大学.

3 Hirano, Keiko. "Grammatical variation in a dialect contact situation: Accommodation of verbs of obligation" The 8th Conference of the International Society for Dialectology and Geolinguistics 2015 年 9 月 17 日 Eastern Mediterranean University, Famagusta, North Cyprus.

4 Ota, Ichiro, and Hitoshi Nikaido. "Tonal Variation of Kagoshima Japanese and Its Constraining factors" UKLVC10 2015 年 9 月 3 日 ヨーク大学 (英国).

5 Sano, Shin-ichiro. "Studying phonological variation using the corpus of spontaneous Japanese" ICPP 2015 年 9 月 27 日 慶應義塾大学三田キャンパス.

【2014 年度】

6 平野圭子. "Code-switching in the Anglophone community in Japan" The 15th International Conference on Methods in Dialectology 2014 年 8 月 12 日 University of Groningen, Groningen, the Netherlands.

7 平野圭子, Britain, D. "Accommodation, dialect contact and grammatical variation: verbs of obligation in the Anglophone community in Japan" The 3rd Conference of the International Society for the Linguistics of English 2014 年 8 月 24 日 University of Zurich, Zurich, Switzerland

8 Ota, Ichiro, Hitoshi Nikaido, and Akira Utsugi, "Tonal variation in Kagoshima Japanese and factors of language change," METHODS XV, 2014 年 8 月 15 日 (University of Groningen, オランダ).

9 Sano, Shin-ichiro. "Universal Markedness Reflected in the Patterns of Voicing Process." The 45th conference of North East Linguistic Society (NELS 45), at Massachusetts Institute of Technology, Massachusetts, USA: November 1, 2014.

10 Fukasawa, Haruka, Mafuyu Kitakara, Shigeto Kawahara, and Shin-ichiro Sano. "Two is too much: [p]-driven geminate devoicing in Japanese." Phonology Forum 2014, at the University of Tokyo, Tokyo: August 22, 2014.

11 Sano, Shin-ichiro. "Rendaku in Spontaneous Speech." The 14th conference of Laboratory Phonology (LabPhon 14), at National Institute for Japanese Language and Linguistics, Tokyo: July 26, 2014.

12 Sano, Shin-ichiro. "Examining Lexical and Phonological Factors on Rendaku in Spontaneous Speech." 7th Formal

Approaches to Japanese Linguistics, 国際基督教大学, Tokyo: June 29, 2014.

13 Fukasawa, Haruka, Mafuyu Kitakara, Shigeto Kawahara, and Shin-ichiro Sano. "[p]-driven devoicing of geminates in Japanese: Empirical data and a formal analysis." 7th Formal Approaches to Japanese Linguistics, 国際基督教大学, Tokyo: June 28, 2014.

14 Sano, Shin-ichiro. "Lexical Frequency and Applicability of Rendaku, and its Productivity." New Ways of Analyzing Variation Asia-Pacific 3, at Victoria University of Wellington, Wellington, New Zealand: May 2, 2014.

15 Takano, Shoji. "A real-time study of standardization of lexical accents in Sapporo Japanese: What can we generalize from panel samples?" Sociolinguistics Symposium 20 in Jyväskylä, Finland.

【2013 年度】

16 Hirano, Keiko. "Dialect change and the early stage of koineisation of English in the Expanding Circle" The 7th International Conference on Language Variation in Europe 2013 年 6 月 26 日 Sor-Trondelag University College, Trondheim, Norway.

17 Hirano, Keiko. "A new-dialect formation in an L2 setting: A rudimentary levelling among native speakers of English in Japan" The 19th International Congress of Linguists 2013 年 7 月 25 日 University of Geneva, Geneva, Switzerland.

18 Matsuda, Kenjiro. "The effect of the speaker's sex and age on the relative frequencies of nouns, pronouns and verbs" The relative frequencies of nouns, pronouns, and verbs in discourse. An international workshop 2013 年 8 月 13 日 Max Planck Institute for Evolutionary Anthropology, Leipzig, Germany.

19 Ota, Ichiro. "Tonal change of Kagoshima Japanese and the impact of media" Urban Language Seminar 11 2013 年 8 月 18 日 広島市文化交流会館.

20 Sano, Shin-ichiro and Shigeto Kawahara. "A Corpus-Based Study of Geminate Devoicing in Japanese" RUMMIT 2013 2013 年 4 月 6 日 University of Massachusetts, Amherst, Massachusetts.

21 Sano, Shin-ichiro. "The Roles of Internal and External Factors and the Mechanism of Analogical Leveling: Variationist-and Probabilistic OT Approach to Ongoing Language Change in Japanese Voice System" Spring Meeting of The Phonological Society of Japan 2013 年 6 月 14 日 東京首都大秋葉原キャンパス.

22 Sano, Shin-ichiro. "Modeling the

Sequential Changes of Verbal Inflections in Potential Forms in Japanese" 19th International Congress of Linguists 2013年7月22日 University of Geneva, Geneva, Switzerland.

23 Sano, Shin-ichiro, and Shigeto Kawahara. "Testing rendaku experimentally: Rosen's Rule, (Strong) Lyman's Law and Identity Avoidance" Monthly Meeting of the Tokyo Circle of Phonologists 2013年10月19日 University of Tokyo, Tokyo.

24 Kawahara Shigeto and Shin-ichiro Sano. "Identity Avoidance and Rendaku Phonology" 2013年11月9日 University of Massachusetts, Amherst, Mass., USA.

25 Fukasawa, Haruka, Mafuyu Kitakara. Shigeto Kawahara, and Shin-ichiro Sano. "[p] causes devoicing of geminates in Japanese" International Conference on Phonetics and Phonology 2013年12月20日 国立国語研究所, Tokyo, Japan.

26 Sano, Shin-ichiro, and Shigeto Kawahara. "Testing rendaku experimentally: Rosen's Rule, (Strong) Lyman's Law and Identity Avoidance" International Conference on Phonetics and Phonology 2013年12月22日 国立国語研究所.

〔図書〕(計5件)

【2015年度】

1 松田謙次郎. 「大正～昭和前期の演説・講演における漢語の読みのゆれ」 相澤正夫・金澤裕之(編) 『SP 盤演説レコードがひらく日本語研究』(笠間書院) 69-87.

2 Hirano, Keiko. "Code-switching in the Anglophone community in Japan" In Marie-Helene Cote et al. (eds.), *The Future of Dialects: Selected Papers from Methods in Dialectology XV* Berlin: Language Science Press 305-312.

【2013年度】

3 Hirano, Keiko. *Dialect contact and social networks: Language change in an Anglophone community in Japan*. Peter Lang.

4 Ota, Ichiro and Shoji Takano. "The media influence on language change in Japanese sociolinguistic contexts." In J. Androutsopoulos (ed.), *Mediatization and Sociolinguistic Change*. Berlin: De Gruyter. 171-203.

5 高野照司. 「札幌市方言名詞アクセントの共通語化に関する実時間パネル調査 第三次報告 バリエーションを支配する「言語内的要因」に関する一考察」『生活語の世界』北海道方言研究会40周年記念文集 37-50.

〔産業財産権〕

出願状況(計 0件)

名称:  
発明者:  
権利者:  
種類:  
番号:  
出願年月日:  
国内外の別:

取得状況(計 件)

名称:  
発明者:  
権利者:  
種類:  
番号:  
取得年月日:  
国内外の別:

〔その他〕  
ホームページ等

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

松田 謙次郎 (Matsuda Kenjiro)  
神戸松蔭女子学院大学・文学部・教授  
研究者番号: 40263636

### (2) 研究分担者

太田 一郎 (Ota Ichiro)  
鹿児島大学・法文学部・教授  
研究者番号: 60203783

平野 圭子 (Hirano Keiko)  
北九州市立大学・外国語学部・教授  
研究者番号: 60341286

高野 照司 (Takano Shoji)  
北星学園大学・文学部・教授  
研究者番号: 00285503

佐野 真一郎 (Sano Shin-ichiro)  
慶應義塾大学・商学部・准教授  
研究者番号: 30609615

### (3) 連携研究者

日比谷 潤子 (Hibiya Junko)  
国際基督教大学・教養学部・教授  
研究者番号: 70199016